【資料紹介】

渡部寛一郎日記2（明治三十一年部分）注釈

大國　由美子
（渡部寛一郎文書研究会）

摘　要

『山陰研究』で翻刻を連載している、『渡部寛一郎日記』は、当時の山陰における教育の実態、地域政治と中央政治との関係を知るのに、貴重な史料である。ただ、記載されている人名や事項については、不明な点が多く、注釈なしでは、理解しにくい。本稿では、諸史料にあたって、できうる限り、事績や背景を明らかにしようと試みたが、不明な点も多い。博雅の示教を請う。今回は、『渡部寛一郎日記』第二冊（明治三十一年・三十二年）の手帳の明治三十一年部分について注釈を行った（紙數の関係で、本号掲載の翻刻と範囲が少しく異なることに注意）。この注釈が、渡部寛一郎が、彼が校長を務めた修道館中学の経営のために、中央政官界、全国の教育者、旧藩関係者と交流する様子やその背景を理解するための一助となれば、幸いである。

キーワード：渡部寛一郎　近代　政治　教育　漢詩

〔凡例〕

一、「渡部寛一郎関係文書」渡部寛一郎日記第二冊のうち、明治三一年部分の人名・用語について、辞典等で調査したものである。スペースの都合上、特に著名人については、明治三一年前後の経歴を主にして記述した。詳細については出典等を参照されたい。また、できるだけ文献で裏付けをとるようにしたが、インターネットのみでしか確認できていないものもあり、その場合はアドレスを記載した。アドレスは二〇一八年九月末現在のものである。

一、日付順、登場順に全ての人名・事項について記載した。ただし、渡部の親戚（矢田長之助、千代子、渡部謙一郎、渡部善継）は頻出するため、初出にまとめた。また、同一日に何度か登場する人物についても一日に一度だけあげた。

一、人名（事項）、【日記掲載年月日】、生年―没年、出身地、経歴（内容）の順に記載した。

一、以下の辞典等については、略して記載した。

島洋之助編『人材・島根』島根文化社、一九三八年→『人材』

伊藤菊之輔編『島根県人名事典』報光社、一九七〇年→『伊藤島根』

山陰中央新報社島根県歴史人物事典刊行委員会編『島根県歴史人物事典』山陰中央新報社、一九九七年→『島根歴史』

下中邦彦編集兼発行『日本人名大事典』一九三七年〜一九三八年初版、一九八三年　復刻版第二刷、平凡社→『平』

国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』吉川弘文館→『国史』

臼井勝美、高村直助、鳥海靖、由井正臣編『日本近現代人名辞典』吉川弘文館、二〇〇一年→『近現代』

槌田満文編『新装普及版　東京文学地名辞典』東京堂出版、一九九七年→『東京文学』

松江北高等学校百年史編集委員会『松江北高等学校百年史』島根県立松江北高等学校、一九七六年→『北高』

少年園編『東京遊学案内』一八九七年、ＴＯＫＹＯアーカイブ（東京都立図書館デジタルアーカイブ http://archive.library.metro.tokyo.jp/da/top）

→『東京遊学』

以下、国立国会図書館デジタルコレクション（http://dl.ndl.go.jp/）

「官報」

『島根県職員録』

『職員録（甲）』→『職甲』、印刷局

『職員録（乙）』→『職乙』、印刷局

　『職員録』（甲）（乙）ともに明治三一年度は欠号。

永井良知編輯『東京百事便』三三文房、一八九〇年→『百事便』

土岐秀苗、東都沿革調査会編纂『最新東京案内記　春の巻』教育舎、一八九八年六月→『案内記春』

〔注釈〕

新快漕丸【明治31・9・9】

香川方【明治31・9・9】『帝国実業名鑑』（帝国実業名鑑編輯部、一八九九年）に、「各国御旅館兼書画骨董商　境町　香川幸平　明治六年開業」、「当港ニ於テ上ハ大阪間下ハ北海道小樽ニ至ル各港及ヒ隠岐国其他近傍ニ至ル汽船御乗客等至極叮嚀ニ御取扱可申上候間陸続御来館アランコトヲ奉希上候」と載る。隠岐島往復の客を泊めて明治、大正を通じて繁栄していたという。（境港市『境港市史』一九八六年）

熊本丸【明治31・9・9】同日の『山陰新聞』広告に「日本郵船熊本丸　九月九日午后出境　敦賀伏木直江津新潟酒田土崎函館小樽行（略）伯耆国境港　栢木回漕店松江支店」とあり。栢木回漕店は日本郵船株式会社、大阪商船株式会社の扱所。（『帝国実業名鑑』『境港市史』）

山本邦之助氏祖父【明治31・9・9】

渋川千之助【明治31・9・9】明治四年（一八七一）―？　渋川忠二郎（松江藩士、関西大学創設者）の子。明治二五年（一八九二）東京帝国大学法科英法科卒。弁護士。大阪市西区江戸堀。（『人材』、『島根歴史』）

大谷、山根豊市【明治31・9・9】

東海道汽車不通【明治31・9・10、11】『東京朝日新聞』（明治31・9・8）によると、六日夜から翌朝の暴風雨により東海道線中、山北

―小山間、小山間―御殿場、蒲原―興津間の線路が破壊され、汽車が不通となり、新橋停車場では小山以西の切符の発売を中止しているという。山北―小山間では、山崩れもしくは線路が三十間押し出された箇所もあると報じられている。

馬入川アリ渡シアリ鉄路破損【明治31・9・12】『東京朝日新聞』（明治31・9・9）には、六日夜の暴風雨により、相模川の末流・馬入川も氾濫し、鉄橋の橋桁が流出したため、午後四時二十九分横浜発下り列車は茅ヶ崎で停車、茅ヶ崎―平塚間も不通となり、修繕に二～三日はかかると報じられている。

山本宗連、高藤直太郎、島田、三浦菊右衛門、伊藤恵市、樋野唯一、馬場【明治31・9・12】、**渋川千之助**【明治31・9・12】（前出【明治31・9・9】）、**村岡セイ、お角、お常、岩崎家**【明治31・9・12】

山本邦之助【明治31・9・13】明治二年（一八六九）―昭和三〇年（一九五五）松江市。松江中学、島根師範中退。明治二五年（一八九二）東京高等商業学校卒。明治二七年（一八九四）日本郵船に入社、海外勤務を経験。昭和三年（一九二八）ペルーに渡航、邦字新聞で健筆をふるう。（『島根歴史』）

本庄【明治31・9・13】

飯田館【明治31・9・13】「（麹町区飯田町）町内にて有名なる旅館は、飯田館なりとす、常に政党員、官吏、紳商、及議員等の客多し、されば客室なども高尚にして、合宿などする恐れなく、一人に一室を限れり、又此家は年来の常客か、又は其紹介なきものは、如何なる人と雖も宿泊を許さず、頗る厳正確実を旨とせり」（『案内記春』）

枚野【明治31・9・13】

謙一郎【明治31・9・13、14、15、17、18、23、28、29、10・1、2】渡部謙一郎。渡部寛一郎の子。明治三〇年（一八九七）三月松江中学卒と同一人物か。（『北高』）

楳【明治31・9・13】梅謙次郎。万延元年（一八六〇）―明治四三年（一九一〇）松江市。明治一七年（一八八四）司法省法学校卒。仏・独に留学、明治二三年（一八九〇）帝国大学法科大学教授。明治二六年（一八九三）法典調査会起草委員に就任。明治三〇年（一八九七）同法科大学長、政府の法制局長官。明治三二年（一八九九）和仏法律学校（現法政大学）校長、明治三三年（一九〇〇）文部省総務長官。（『島根歴史』、『近現代』）

横澤【明治31・9・13】横澤文也。安政四年（一八五七）―？　宮城県。明治八年（一八七五）磐井県師範学校卒。以後宮城県気仙沼小学校訓導、新潟県医学校助教諭、同県亀田小学校長、山梨県尋常中学校教諭、三重県師範学校教諭、愛媛県西条中学校教諭、島根県浜田中学校首席教諭を歴任、初代簸川中学校校長に任じられた（任期、明治三一年〈一八九八〉四月～明治三五年〈一九〇二〉三月）。（出雲高等学校史編集刊行委員会編『出雲高等学校史』島根県立出雲高等学校、一九九〇年）

矢田方【明治31・9・13、15、16、29、30】（**矢田長之助**【明治31・9・29、10・1、明治卅二年四月調】**矢田千代子（千代）**【明治31・9・15、17、18、23、27、29、10・1】）矢田長之助・千代子。千代子は渡部寛一郎長女。矢田長之助…明治四年（一八七一）―昭和一五年（一九四〇）出雲市。塩冶小学校卒業後、渡部寛一郎の私塾普通学舎に学ぶ。明治一八年（一八八五）九月松江中学入学、明治二三年（一八九〇）卒業。明治三二年（一八九九）高等文官試験に合格、外交官に。この頃渡部千代子と結婚。明治三五年（一九〇二）清国天津の

日本領事館領事館補をふりだしとして、メキシコ代理公使、漢口、バンクーバーの領事、オタワ、ニューヨーク、ハワイ等の総領事を歴任してシャム国（現タイ国）公使。大正一三年（一九二四）特命全権公使としてシャム国通商航海条約調印。（出雲塩冶誌編集委員会『出雲塩冶誌』出雲塩冶誌刊行委員会、二〇〇九年、『人材』、『北高』）東京小石川区原町一三三。

片山、塩谷　塩谷吟策か。【明治31・9・14】

全国中学校長会議【明治31・9・15～26】明治三一年九月一五日～二六日まで高等商業学校内講堂で開催。初めて公私立区別なく全国の中学校長を集めた会議で、初日は一〇〇名以上出席。文部省諮問案第一号～四号と、各中学校長建議案について討論される。九月一七日は、第一号諮問案第一項「高等普通教育を施すが為め及び高等の学校に入学せんとする者の準備を為すが為に二種の中学を設くるの可否」について討論された。この会議では三つの意見に分かれたが、一一〇名中八一名の大多数で「二種に分離するを否とするもの」に決定した。二一日には、この日記でも登場する麻布中学校長江原素六の演説、二五日には隈本有尚ら提出の建議案について討議が行われている。最終日の二六日には、毎年一回全国中学校長会議を文部に招集することが可決された。（『東京朝日新聞』明治31・9・14～23、26・27）

尾崎大臣【明治31・9・15】尾崎行雄。安政五年（一八五八）―昭和二九年（一九五四）神奈川県。明治から昭和時代前期にかけての政党政治家。明治二三年（一八九〇）第一回衆議院総選挙に当選、以後昭和二七年（一九五二）の総選挙まで二五回連続当選。明治三一年（一八九八）六月第一次大隈（隈板）内閣の文相として入閣。八月帝国教育会で行った演説が『東京日日新聞』等に共和主義者、不敬と攻撃

され、政治問題化（「共和演説事件」）、九月六日尾崎は参内して陳謝したが事態は収拾されず、一〇月二四日尾崎は文相を辞任。後任問題をめぐって隈板内閣は分裂、一〇月三一日総辞職した。（『国史』『近現代』『日本歴史大事典』小学館、二〇〇〇年）

松平【明治31・9・15】、**池田守吉**【明治31・9・16】

広島明道中学校【明治31・9・17】明道中学校。旧制私立中学校。明治二五年（一八九二）三月嶋末宰三郎を設立者として創立、同四月嶋末元を校長として広島市田中町（当時）に開校した明道学校は、一度下中町（当時）に移り、明治三〇年（一八九七）に尋常中学校（のちの中等学校）となり、明道尋常中学校と改称、明治三三年（一九〇〇）竹屋村の南端（現中区東千田町平野橋南西詰め付近）に移転、大正一二年（一九二三）廃校。明治二八年度（一八九五）広島県統計書では、所在地田中町、学科は普通学となっているが、浅野学校に始まり、明治三八年（一九〇五）修道中学校となった現修道中・高等学校、明治二九年（一八九六）数理学会にはじまり明治四〇年（一九〇七）私立広陵中学校となった現広陵高等学校と並んで、当時、広島市内私立中学校三校のひとつとして知られ、中・四国、九州などの遠隔地からの入学者が多かった。硬骨蛮風の盛んな校風が廃校の遠因であったといわれるが、今日詳細を知るものは稀である。（中国新聞社編『広島県大百科事典』中国新聞社、一九八二年）

島末【明治31・9・17】嶋末元（しまずえはじめ）。文久二年（一八六二）―大正一四年（一九二五）山口県。岩国の儒者に学び、明治一三年（一八八〇）上京、福沢諭吉のもとに学ぶ。明治二五年（一八九二）広島で明道学校創立。初めは袋町、小町から田中町に、さらに南竹屋町に移った。嶋末の教育方針は忠君愛国の精神を鼓吹す

るものであった。文部省から中学の許可を受けてのち校運はますます隆盛になり、明治三三年（一九〇〇）御幸橋の北、南竹屋新開に敷地三九六〇〇㎡を得て一中とその覇を争うように。しかし、時勢の変化により学校の経営が悪化、大正一二年（一九二三）学校を閉鎖。（『広島県大百科事典』）

開花楼【明治31・9・17】「（神田明神）境内に有名なる料理屋開花楼あり、四層の高楼にして楼上七十畳許りの大広間、格天井に彩色の花卉を画き、一望市街の大半を眺望すべし、其絶景盞酒肴の外に別趣を添えて、集会懇親会の会席に適し、官吏及書生の宴会最も多しといふ。」（『案内記春』）

米田穣【明治31・9・18】

山本庫次郎【明治31・9・18】慶応三年（一八六七）―昭和一〇年（一九三五）松江市。明治一二年（一八七九）九月松江中学入学（同期に若槻礼次郎、岸清一ら）、明治一九年（一八八六）七月卒業（同時期の卒業生に野津金之助、松崎故一郎ら）。独学で中等教員免許を取得して高知、埼玉両県の尋常中学教員を歴任、明治三二年（一八九九）から昭和四年（一九二九）まで三〇年間松江中学に在籍して数学を教え、生徒の訓育につとめた。（『島根歴史』、『北高』）

武部繁之助、枚崎友一郎、目次【明治31・9・18】

風月堂【明治31・9・19】『東京百事便』（一八九〇年）によると、風月堂は京橋南伝馬町（本店）、日本橋米沢町、麻布飯倉、神田淡路町にもあるが、島田三郎のいる毎日新聞社（尾張町一丁目）に近い、京橋区南鍋町二丁目の風月堂だろうか。「西洋菓子の店なれとも二階は総て料理向に適せる搆造なり並食金五十銭中食金七十五銭上食金一円にて室内二十人を容るへし其他一品売価金八銭ソップ（スープ）一合金六銭にして何れも風味よろし」

島田三郎【明治31・9・19～21】嘉永五年（一八五二）―大正一二年（一九二三）東京都。明治・大正時代の改進党系の政治家、演説家。明治二三年（一八九〇）第一回総選挙以来衆議院議員連続当選。明治二七年（一八九四）『毎日新聞』社長。明治三一年（一八九八）、憲政党の結成、ついで憲政本党創立に参加したが、同年一一月、脱退して無所属になった。（『近現代』、朝尾直弘ほか編『角川新版日本史辞典』角川書店、一九九六年）

江原素六【明治31・9・19～21】天保一三年（一八四二）―大正一一年（一九二二）東京都。明治・大正時代の政治家、教育家。明治二二年（一八八九）東洋英和学校幹事、のち校長。明治二八年（一八九五）麻布中学校設立。その間、明治二三年（一八九〇）七月衆議院議員に当選、以後当選七回。明治三一年（一八九八）高等教育会議議員、明治三四年（一九〇一）東京市教育会会長。（『近現代』）

園山長野県知事【明治31・9・19～21】園山勇。嘉永元年（一八四八）―大正一〇年（一九二一）松江市。藩校修道館のち江戸の安井息軒に漢学を学び、帰郷して修道館大教授に就任。明治に入って板垣退助の自由民権論に共鳴し、板垣の下で高知県はじめ各地を遊説。明治一二年（一八七九）政治結社尚志社、明治一四年（一八八一）山陰自由党を結成。明治二〇年（一八八七）、明治二三年（一八九〇）に島根県会議員に当選。伊藤内閣の明治三一年（一八九八）、抜擢されて長野県知事、翌年宮崎県知事を歴任した。明治二七年（一八九四）衆議院議員に当選、以後五期在任（『島根歴史』）。なお、明治三一年（一八九八）九月八日の暴風雨で長野県は甚大な被害があったため（九月一七日調査で死者一一八名、負傷者二二名、家屋の流失・破損

三二三八戸、家屋浸水一五一六九戸など。〈「官報」明治三一年九月一九日〉、園山は一六日上京、翌一七日内務大臣に水害の状況を具陳している（『東京朝日新聞』明治31・9・10、18）

聚星館【明治31・9・19〜21】『東京百事便』に「○聚星館（芝口一丁目三番地金子為七）（客室大小十間）諸県の紳士紳商の客又各県知事等も車を枉げらる、多し此家は西洋作の応接所一室ありて客の随意に外来人に対話するに供す又投宿の客の命なれば府下は遠近を問はず用を達するを以て特に勉強の一端となせり其他郵船会社汽車等に関する一切の取扱をなす（宿料金三十五銭より金七十五銭）」とあり。

梅【明治31・9・19〜21】梅謙次郎。前出（【明治31・9・13】）

常盤楼【明治31・9・19〜21】明治三三年（一九〇〇）八月十一日付広告「東京料理案内」によると、「牛鳥御料理」として、浅草雷門、浅草仲見世、神田小川町、浅草日本堤、日本橋よし町、浅草公園の常盤楼が載っている。渡部が訪れたのは、浜町（現中央区日本橋区浜町一〜三丁目）に近い日本橋よし町（現中央区日本橋芳町二丁目、人形町一丁目）の常盤楼だろうか。（明治ニュース事典編纂委員会毎日コミュニケーションズ出版部編『明治ニュース事典Ⅵ明治31年／明治35年』毎日コミュニケーションズ、一九八五年）

冨井【明治31・9・19〜21】

薄井【明治31・9・19〜21】薄井佳久。安政五年（一八五八）—？東京都。大蔵省（出納局、印刷局など）を経て明治二四年（一八九一）日本銀行に転じ、明治三〇年（一八九七）二月二四日—明治三二年（一八九九）二月二一日　日本銀行理事。明治三二年（一八九九）、当時の総裁山本達雄に抗して薄井をはじめ理事・局長・支店長など幹部職員一一名が連袂辞職。帝国商業銀行（現富士銀行）専務取締役、満韓塩業株式会社社長、商業倉庫株式会社社長、明治製糖株式会社、スマトラ興業株式会社の各取締役を務めた。ほかに明治四三年（一九一〇）四月日本火災保険取締役、経理面を引き受けていた。（芳賀登ほか編『日本人物情報大系三三企業家編三』皓星社・二〇〇〇年、日本火災海上保険株式会社企画部企画・編集『日本火災海上保険株式会社七〇年史』一九六四年、『実業の日本』九巻二〇号・一九〇六年九月、日本銀行『日本銀行沿革史　第十巻』一九一三年〈国立国会図書館デジタルコレクション〉、日本銀行百年史編纂委員会編『日本銀行百年史第二巻』日本銀行、一九八三年、『職甲』。東京都立中央図書館のご教示による。）

高木豊三【明治31・9・19〜21】嘉永五年（一八五二）—大正七年（一九一八）京都府。司法省明法寮でフランス法を修め、司法省及び法制局に奉職、明治一七年（一八八四）判事。明治一九年（一八八六）在官のままドイツに留学、帰朝後福島地方裁判所長、大審院判事、司法省民刑局長を経て司法次官。その間法典調査会起草委員、明治三〇年（一八九七）官を辞し弁護士となる。法曹界の重鎮として聞こえた。（『平』）

平根【明治31・9・19〜21】愛知銀行員。**愛知銀行**　明治二九年（一八九六）第十一国立銀行と第百三十四銀行の両行を吸収して設立。初代頭取岡谷惣助。尾張徳川家に関係の深かった有力者によって設立され、士族銀行ともいわれた。昭和一六年（一九四一）名古屋、伊藤銀行と合併、東海銀行に。現三菱ＵＦＪ銀行。（中日新聞社開発局編『愛知百科事典』中日新聞本社、一九七六年、「三菱ＵＦＪ銀行」https://www.bk.mufg.jp/index.html）

岸清一【明治31・9・19〜21】慶応三年（一八六七）—昭和八年

（一九三三）松江市。明治一二年（一八七九）松江中学入学（同期に若槻礼次郎、山本庫次郎、後藤蔵四郎）。明治一六年（一八八三）卒業、明治二二年（一八八九）東京帝国大学法科卒業、翌年弁護士に。明治三〇年（一八九七）、一念発起して法律の勉強のためアメリカ、イギリスに留学。帰国後は依頼が殺到したと伝えられる。渡部寛一郎日記には、このときの岸の洋行について記されている（【明治30・2・14、3・6】）。一方、嘉納治五郎に次いで大正一〇年（一九二一）大日本体育協会第二代会長、大正一三年（一九二四）二人目の国際オリンピック委員会委員。選手団を率いてオリンピックに参加するなど、オリンピック日本誘致に情熱を傾け、物心両面にわたって日本、島根県のスポーツ振興に貢献した。（『島根歴史』、『近現代』）

錦輝館【明治31・9・22】現東京都千代田区神田錦町にあった貸席・集会場。明治二四年（一八九一）一〇月開場。明治三〇年（一八九七）三月のヴァイタスコープ上映に始まる活動写真の興行で知られる。明治四一年（一九〇八）八月からは館内に活動写真部が設置された。また、赤旗事件の舞台としても名高い（『東京文学』）。「都下屈指の貸席にして、建築の広大なる他に其比を見ず、優に千人を入るに足る、されば大演説会、大懇親会、大演芸会等を開くに最も適せり、該館は又貸席の外に即席料理をも兼ねたり、及錦亭と看板か、げたるはこれなり。」（『案内記春』）

嘉納高等師範学校長【明治31・9・22】嘉納治五郎。万延元年（一八六〇）－昭和一三年（一九三八）兵庫県。明治三〇年（一八九七）～大正九年（一九二〇）東京高等師範学校長、文部省普通学務局長などを歴任。また、明治三二年（一八九九）亦楽書院（のち弘文学院）創立。一方、柔術に新しい体育的・精神的・技術的工夫を加え柔道と称し、明治一五年（一八八二）講道館を開きこれを指導した。また、オリンピック日本招致に奔走、東京開催権獲得、冬期競技場の札幌招致に成功した。（『近現代』、柔道大事典編集委員会『柔道大事典』アテネ書房、一九九九年）

学制研究会【明治31・9・22】

帝国教育会【明治31・9・22】教員を中心に結成された日本最初の全国的教育団体。明治一〇年（一八七七）代の初め東京府下の教員有志が組織した東京教育会や東京教育協会が明治一五年（一八八二）に合体して東京教育学会（のち東京府教育談会）を組織、翌一六年（一八八三）九月九日、これに府県学務課長や師範学校長から成る文部省主催の学事諮問会が合流して結成された。明治二九年（一八九六）一二月二五日国家教育社と合併、帝国教育会と改称。のち大日本教育会（昭和一九年（一九四四））、日本教育会（昭和二一年（一九四六））となり、昭和二三年（一九四八）八月解散。（『国史』）

西山【明治31・9・23】

青年会館【明治31・9・23】神田美土代町。明治二七年（一八九四）五月五日開館。東京キリスト教青年会館。二〇〇三年本部会館は取り壊された。（ウィキペディア https://ja.wikipedia.org/wiki/東京キリスト教青年会会館）「東京基督教青年会館あり、該協会は基督教青年会の建立にか、り、毎日曜日道徳上の講話ありて、衆人の傍聴を許し、書籍新聞縦覧所の設ありて、随意に人の見るにまかせ、且つ其大講堂を開いて、諸会社銀行等の総会に貸与することあり、猶館内には青年会夜学校あり、本科撰科の二科に分ちて実用英語を教授する所とす」（『案内記春』）

青柳亭【明治31・9・23】『東京百事便』（一八九〇）にある「青柳」

か。「集会貸席　青柳　外神田福田屋の東隣にありて万事福田屋と伯仲す」

修道館同窓会【明治31・9・23】『山陰新聞』（明治31・9・28）によると、東京外神田青柳亭にて午後二時～七時まで開催。幹事曽田忠太。上京中の渡部寛一郎のために懇話会を開く。参加者はほかに上代謙造、山本邦之助、高橋慶太郎、高橋龍雄、水谷京四郎ら。和気藹々快を尽くして退散したという。

山本邦【明治31・9・23】山本邦之助。前出（【明治31・9・13】）、

帝国教育会【明治31・9・24】前出（【明治31・9・22】）

加藤弘之【明治31・9・24】天保七年（一八三六）—大正五年（一九一六）兵庫県。明治の政治学者、初代の東京大学綜理。明治一〇年（一八七七）より東京開成学校綜理・東京大学法学部・理学部・文学部綜理、同大学綜理、総長を歴任、明治三四年（一九〇一）名誉教授。明治一二年（一八七九）東京学士会院会員、明治一九年（一八八六）元老院議官、明治二三年（一八九〇）貴族院議員、明治二八年（一八九五）宮中顧問官、明治三三年（一九〇〇）男爵、明治三八年（一九〇五）法学博士、明治三九年（一九〇六）帝国学士院長、枢密顧問官。このほか高等教育会議長、教科書調査委員会長などをつとめた。著書多数。（『国史』）

音楽学校【明治31・9・25】高等師範学校附属音楽学校。現東京芸術大学音楽学部。『東京遊学案内』によると、明治二九年（一八九六）一二月段階で、主事上原六四郎以下二〇名の教授助教授、生徒七六名。音楽教員および音楽師の養成に従事。教科を大別して予科（一年）・本科、さらに本科を小別して師範部（二年）・専修部（三年）の二部。入学は九月。授業料一ヵ月金一円。研究科、選科、小学唱歌講習科あり。修業一〇ヵ月間。（『遊学』『国史』）

数学院【明治31・9・25】東京数学院。現東京高等学校。『東京遊学案内』によると、明治二九年（一八九六）一二月段階で、神田猿楽町二番地。校長上野清。教員二四名。生徒八〇〇名。主に数学を教授するほか、英語、漢学等を教授。専門学部（数学部、英学部、漢学部）、尋常中学部、陸海軍受験科、選修科。修業期限は、数学は一学期約四ヵ月、別科、普通科（前期後期）、本科（一級～四級）の七学期間。学費は、東修金一円、月謝各部金七〇銭～一円三〇銭、校費一〇銭。

上野清【明治31・9・25】安政元年（一八五四）—大正一三年（一九二四）東京都。幼時漢学を昌平黌に、数学を長兄継光に学ぶ。福田理軒にも学ぶが長ずるに及び殆ど自修的に数理を攻究し明治五年（一八七二）上野塾を開いて子弟を導く。明治二三年（一八九〇）東京数学院を創立、明治二九年（一八九六）仙台に東北中学校を興す。大正九年（一九二〇）東京実業学校を新設。（『平』）

開花楼【明治31・9・25】前出（【明治31・9・17】）、**尾崎大臣**【明治31・9・26】尾崎行雄。前出（【明治31・9・15】）

松平母里公【明治31・9・26】松平直哉（なおちか、なおとし）か。嘉永元年（一八四八）—明治三三年（一九〇〇）母里藩主松平直温の子。元治元年（一八六四）長州藩追討の命を受け、母里藩分封以来初めて帰藩、入国した。明治四年（一八七一）母里県知事を免じられ東京に移住。のち子爵。貴族院議員。（『島根歴史』、新人物往来社編『幕末維新最後の藩主二八五人』二〇〇九年、「官報」明治33・1・6、『山陰新聞』明治33・1・9、10）

伯爵邸【明治31・9・26】松平直亮邸。【明治31・9・28】参照。

松平広瀬公【明治31・9・27】松平直平か。明治二年（一八六九）—

昭和一四年（一九三九）。松江藩主松平定安の子。伯爵松平直亮弟。幼名篤郎。広瀬藩主松平直己の養子。明治一一年（一八七八）学習院入学、明治二七年（一八九四）卒業。明治一五年（一八八二）直平に改名、明治一七年（一八八四）七月子爵。下谷区根岸町に根岸製作所（錫紙製造業）を設け、明治三六年（一九〇三）農商務・大蔵省の嘱託を受けアメリカへ錫紙製造業視察、事業盛況を見る。日本畜産株式会社、八千代生命保険各取締役、仁壽生命保険商議員、東洋拓殖株式会社監事。明治三〇年（一八九七）七月貴族院議員。東京市牛込区市ヶ谷加賀町二ー二一。（『明治人名辞典Ⅱ』日本図書センター、一九八八年〈底本：日本現今人名辞典発行所編『日本現今人名辞典』一九〇〇年〉、『大正人名辞典』日本図書センター、一九八七年〈底本：五十嵐栄吉編・発行『大正人名辞典』第四版、東洋新報社、一九一八年〉、『講談社日本人名大辞典』二〇〇一年）

梅【明治31・9・27】梅謙次郎。前出（【明治31・9・13】）

増上寺【明治31・9・27】三縁山増上寺。関東浄土宗の総本山。徳川家の菩提所。慶長三年（一五九八）本堂が現在地に建てられる。本堂は明治六年（一八七三）廃仏毀釈運動で放火にあい荒廃していたが、明治二三年（一八九〇）に再建。朱塗り入母屋造りの山門、徳川氏代々の霊廟が本堂の北と南にあり、永井荷風の作品に登場している。（『東京文学』）

松田楼【明治31・9・27】『東京百事便』（一八九〇年）にある飲食店か。「日本料理（京橋区部）〇松田　銀坐一丁目にあり雑食店の王にして其繁盛実に驚く可き程なり且煉瓦屋の構造広大にして頗る且廉価なれば地方人なぞの出京する者は必ず先づ此家に飲むを例とせる程なり且顔洗場及厠の清潔なる如きは最も主人の得意とするもの、如し」

大谷父子【明治31・9・27】

松平邸【明治31・9・28】松平直亮（なおあき）か。慶応元年（一八六五）ー昭和一五年（一九四〇）。松江藩主松平定安の子。直平の兄。幼名陽之進又は優之丞。はじめ大阪の豪商大盾五兵衛養子となったが復籍して明治一五年（一八八二）家督を相続、直亮に改名。明治一五年（一八八二）四月学習院入学、明治一七年（一八八四）年二月退学し、以後政治学、漢学、英語などを各分野の師について学ぶ（明治二〇年〈一八八七〉より西村茂樹につき哲学・道徳学を学ぶ）。同年七月伯爵。明治三一年（一八九八）出雲育英会会頭、明治三六年（一九〇三）日本弘道会副会長、明治三七年（一九〇四）貴族院議員。明治三八年（一九〇五）日本弘道会会長、大正七年（一九一八）北海道で一七〇〇ヘクタールの開墾に着手。昭和一二年（一九三七）北海道開拓の全農地を分譲して自作農を創設する。夫人充子は公爵島津忠重姉。東京市四谷区元鮫橋五八。（『島根歴史』、『伊藤島根』、西邑木一『華族大観』史籍出版、一九八一年、『明治人名辞典Ⅱ』、『講談社日本人名大辞典』）

山口【明治31・9・28】山口亮か。松平直亮家家扶。（神田中学校友会編『皇室之藩屏』皇室藩屏社、一九〇一年、国立国会図書館デジタルコレクション）、**安井泉**【明治31・9・28】松平直亮家家扶。（『皇室之藩屏』）

常磐亭【明治31・9・28】「洽集館を出で、向側に常磐亭の牛肉店あり、浅草雷門前なる常磐亭の第三支店、庭広く家造りの奇麗なるは第二支店（日本堤）に次ぐ、階上階下各小さき室に分たれ、甲客乙客雑居ならぬはありふれたる牛肉店と異なり、先づは高等なる牛肉店とも云ふへきか、（略）顧客日夜絶ゆることなく、従つて雇男女忙しく立

働きて「いらツしゃい」「御帰んなさい」「御粗末さま」の声かまびすし」（『案内記春』）

岸清一【明治31・9・29】前出（【明治31・9・19～21】）

商船学校【明治31・9・29】現東京海洋大学。明治八年（一八七五）私立三菱商船学校設立、明治一五年（一八八二）四月官立となり、東京商船学校と改称。（「東京海洋大学」https://www.kaiyodai.ac.jp）『東京遊学案内』によると、逓信省の管理に属す。京橋区霊岸島銀町二丁目。校長心得平山藤次郎。教員二四名。生徒二六〇名。航海、機関に関する学術技芸を教授し、高等の船舶職員を養成。生徒は在学中並に卒業後とも海軍士官の予備員にして、一定の規則により服役するものとす。教科は、航海科（五年五ヶ月）、機関科（五年）。入学の期は毎年二月。生徒は年齢一五年以上二一年以下にして、体格検査、学科試験あり。学生は退学を許さず。生徒の経費は自費貸費問わず一ヶ月金八円。大阪及び函館に商船学校分校を置き、簡易科、別科あり。本校及び分校とも自費貸費に限らず試験料、授業料、校費を徴収せず。

野津金之助【明治31・9・29】新堀町東洋汽船会社。明治一九年（一八八六）七月松江中学高等科卒業。同時期の卒業生に山本庫次郎、初等科松崎故一郎ら。（『北高』）

東洋汽船会社【明治31・9・29】明治二九年（一八九六）七月、外国航路進出を図る浅野総一郎が浅野回漕店を母体に設立。日本郵船、大阪商船に次ぐ第三の社船企業として地歩を固めていくが、第一世界大戦後、資金繰が悪化、さらに安田善四郎の死により安田財閥との関係が弱まり、大正一五年（一九二六）日本郵船にサンフランシスコ線などの航路権と汽船八隻を譲渡、昭和三四年（一九五九）日本油槽船会社に合併された。（『国史』）

柴田、板持【明治31・9・29】、**高木豊三**【明治31・9・30】前出（【明治31・9・19～21】）、**清水、木村、大谷**【明治31・9・30】、**薄井**【明治31・9・30】薄井佳久。前出（【明治31・9・19～21】）、**数学院**【明治31・9・30】前出（【明治31・9・25】）、**上野清**【明治31・9・30】前出（【明治31・9・25】）

西村茂樹【明治31・9・30】文政一一年（一八二八）—明治三五年（一九〇二）　佐倉藩士、明治時代の文部官僚、道徳思想家。明治六年（一八七三）文部省に出仕。同年明六社を組織。政府の欧化傾向がはっきりしてくるに従い国民道徳の回復を志向するようになる。明治九年（一八七六）東京修身学社を創設、明治一七年（一八八四）日本講道会、明治二〇年（一八八七）日本弘道会に改称。明治二一年から三三年まで盛んに地方講演旅行に出、「人心を正し、風俗を善く」する道徳運動を拡げることにつとめる（『近現代』）。なお、公刊している西村の日記では、九月三〇日の記述を欠く。（日本弘道会『増補改訂西村茂樹全集　第九巻　訳述書五　日記』思文閣出版、二〇一〇年）

目次、枚原【明治31・9・30】、**松平家**【明治31・10・1】松平直亮。前出（【明治31・9・28】）

文部省次官【明治31・10・1】柏田盛文。嘉永四年（一八五一）—明治四三年（一九一〇）鹿児島県。明治九年（一八七六）慶應義塾卒。鹿児島県川内七ヶ郷学区取締となり、後県会議員議長など。明治二〇年（一八八七）四月第四高等中学校長、明治二五年（一八九二）一月鹿児島県第四区より撰ばれて衆議院議員となり、当選四回（国民協会）。明治三〇年（一八九七）四月から千葉県知事、明治三一年（一八九八）七月五日～明治三二年（一八九九）四月七日文部次官、明治三三年（一八九九）四月から茨城県知事、明治三三年（一九〇〇）九月～明治

三六年（一九〇三）二月新潟県知事。（戦前期官僚制度研究会・秦郁彦編『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』（財）東京大学出版会一九八一年、『明治人名辞典Ⅱ』、上田正昭ほか監修『講談社日本人名大辞典』講談社、二〇〇一年、歴代知事編纂会編集・発行『日本知事人名事典』日本図書センター、二〇一二年）

片山　片山吉則か、**木村**　木村峰之助か。【明治31・10・1】

松本楼【明治31・10・1】『東京百事便』（一八九〇年）にある店か。「日本料理　京橋区　〇松本楼　尾張町印刻会社の横町にあり即席料理にして「鯉こく」と「浜河井」の名代なり座敷は凡て七間あり」

梅氏【明治31・10・1】梅謙次郎。前出（【明治31・9・13】）、**柴田、板持、杦崎、渡部林、市川、野津**【明治31・10・2】　**柴田、板持**【明治31・10・2】

泉岳寺【明治31・10・2】万松山泉岳寺。曹洞宗。寛永一八年（一六四一）外桜田から移されたもので、元禄一六年（一七〇三）二月に切腹した赤穂四七士の菩提寺として名高い。本堂は昭和二〇年（一九四五）五月の空襲で焼け、戦後再建された。（『東京文学』）

善継【明治31・10・3、4、明治卅二年四月調】渡部善継。渡部寛一郎の弟。幼名源次郎。松江藩士、小学校教員、島根県吏（明治一六年〜明治一七年　衛生課）、出雲・楯縫・神門郡（明治一四年〜明治一六年　郡書記）、島根・秋鹿・意宇郡（明治一七年〜明治二三年　郡書記）郡吏を歴任。明治二三年（一八九〇）わけあって辞職。大阪で民間業務に従事。明治三三年（一九〇〇）五月二日病没。享年四六。（松江市寺町称名寺墓碑、要木純一翻刻。（　）内は『島根県職員録』『職乙』で確認できた年。）大坂市西区九条二番道路二丁め橋東北入ル。

諏訪善子【明治31・10・4】

川口プール女学校【明治31・10・4】プール学院。明治一二年（一八七九）六月大阪川口居留地四番に、女性宣教師ミス・メアリー・J・オスクラドが『永生女学校』を開設。明治一六年（一八八三）一二月、A・W・プール監督が、在日本CMS初代監督として来日、明治二三年（一八九〇）A・W・プール主教を記念し『普溜女学校』と改名。昭和四年（一九二九）三月文部省によりプール高等女学校の設置認可。プール女学校を廃校とする。昭和二二年（一九四七）四月校名を『プール学院』と変更、『プール学院中学校』設置。翌年四月『プール学院高等学校』設置。その後短期大学、大学国際文化学部（男女共学）、大学院開学、現在に至る。（「プール学院中学校・高等学校」(http://www.poole.ed.jp/) 現在は大阪市生野区勝山北）

内田慎【明治31・10・4】島根県職員、大原郡職員か。『島根県職員録』『職員録（乙）』によると、島根県士族。明治一二年（一八七九）年〜明治一三年（一八八〇）（島根県）庶務課、明治一四年（一八八一）〜明治一七年（一八八四）（島根県）衛生課、明治一九年（一八八六）、明治二一年（一八八八）島根県第二部に名前が確認でき、明治二一年は尋常師範学校書記も兼務しており、この年渡部寛一郎は尋常師範学校助教諭。明治二三年（一八九〇）〜明治二四年（一八九一）は仁多大原郡役所の書記として内田慎の名前が見える。

山崎、段塚【明治31・10・4】、**関根**【明治31・10・5】

和田崎【明治31・10・5】神戸市にある岬。神戸港の中央部西寄りに港を抱くように南西から突出する。岬の東側は大輪田泊と称した奈良期以来有名な兵庫の津。幕末には和田岬砲台、明治には灯台も完成した。和楽園・内国勧業博覧会場。現在は造船所の構内となり、旧観

はすっかり姿を消した。（『角川日本地名大辞典』編纂委員会『角川日本地名大辞典28兵庫県』角川書店、一九八八年）

水族館並和楽園【明治31・10・5】明治二八年（一八九五）、第四回内国勧業博覧会付属の施設として、和田岬の遊園地「和楽園」に「和田岬水族放養場」が開設。明治三〇年（一八九七）、第二回水産博覧会が神戸で開催された際、神戸市は「和田岬水族放養場」を充実させ、本格的な水族館を開設。日本最初の水族館と言われている。博覧会終了後、湊川神社の境内に移築再建され、「楠公さんの水族館」として明治三五年（一九〇二）から明治四三年（一九一〇）閉館まで約八年間、市民に親しまれた。なお、渡部が訪れた段階の水族館の状況は調べることができなかった。今後の課題としたい。（神戸市役所「神戸を知る　神戸の水族館」http://www.city.kobe.lg.jp/information/institution/institution/library/furusato/suizokukan.html）、鈴木克美『水族館への招待』丸善ライブラリー一一二、丸善株式会社、一九九四年）

山本邦【明治31・10・5】山本邦之助。前出（【明治31・9・13】）、

山崎、段塚【明治31・10・6】

須磨寺【明治31・10・6】神戸市須磨区にある真言宗須磨寺派の本山。仁和二年（八八六）聞鏡の創建と伝えられ、源頼政が再興。大永六年（一五二六）寺宝の平敦盛の御影と笛を神呪寺で開帳・勧進して好評を博し、須磨浦に敦盛塚を建てた。明治二四年（一八九一）頃には須磨寺境内に桜一〇〇〇本を植えて新吉野と称された。（『角川新版日本史辞典』、『角川日本地名大辞典28兵庫県』）

衝濤館【明治31・10・6】『旅館要録』（東京人事興信所調査、増補改訂七版四四年度後期、国立国会図書館デジタルコレクション）に「開業明治二十二年和風二階建客間十四　＊Ａ　衝濤館　館主　葛西太助」とあり。大阪朝日新聞社が催した連続講演会のため夏目漱石が明治四四年（一九一一）八月一二日に宿泊した宿として知られ、漱石の日記および内田百閒「明石の漱石先生」には、漱石が「二階の、鉤の手になつた、縁続きの海に臨んだ部屋」で市長らに応対、宿近くに海があり、宿泊客が泳いだり芸者とボート遊びをしていること、遠く淡路の燈台などが見えること、西洋人の客がいたことなどが記されている。また、内田は中学五年生の夏、宿賃が高かったため衝濤館に泊まることを断念したという。（日本近代文学会関西支部兵庫近代文学事典編集委員会編『兵庫近代文学事典』和泉書院、二〇一一年、『定本漱石全集』第二十巻・別巻、岩波書店、二〇一八年）

人丸神社【明治31・10・6】柿本神社（通称人丸さん）。仁和三年（八八七）現在の赤松山にあったといわれる楊柳寺の僧覚証が柿本人麻呂の霊を感得、境内に小祠をたてたのが起こりと伝える。元和四年（一六一八）明石新城築城の際、現在地に移し、社殿を新築。境内には松平信之が建てた人麻呂顕彰碑がある。（『角川日本地名大辞典28兵庫県』）

明石旧城址【明治31・10・6】江戸期の城郭。明石市明石公園に所在。大坂の陣で戦功のあった小笠原忠真が、二代将軍徳川秀忠に命ぜられて築城。明治維新後城地は学校や公園となったが、明治三一年（一八九八）明石離宮建設用地として宮内省の所轄となり、大正七年（一九一八）県に払い下げられ県立明石公園となった。城郭中心部の石垣はほぼ完全な形をとどめている。（『角川日本地名大辞典28兵庫県』）

関根、中村、花月亭【明治31・10・6】、**枚原**【卅三年頃県外礼状】、

梅【卌二年頃県外礼状】梅謙次郎。前出（【明治31・9・13】）、**木村、片山、早乙女、清水、目次、杦崎友、柴田柴　柴田柴一郎、池田守吉**【卌二年頃県外礼状】、**西村先生**【卌二年頃県外礼状】**西村茂樹**。前出（【明治31・9・30】）

井上先生【卌二年頃県外礼状】小石川表町一〇九。井上哲次郎か。明治三〇年の日記（「翻刻　渡部寛一郎日記1」『山陰研究10』）に「~~小石~~川牛込表一〇九　井上哲次郎」とあり。渡部は県から師範学科取調員として、明治一五年（一八八二）から一年間、東京師範学校、東京体操伝習所で学ぶことを命じられるが、この間、明治一六年（一八八三）一月から七月まで、大学教授井上哲次郎について心理学を学んでいる（『北高』）。**井上哲次郎**　安政二年（一八五五）―昭和一九年（一九四四）福岡県。明治一五年（一八八二）東大助教授となり東洋哲学史を講じた。明治二三年（一八九〇）ドイツ留学帰国後帝大哲学科の教授に任じられ、以後大正一二年（一九二三）六九歳で退職するまで哲学界の大御所として教育界にも隠然たる勢力をもっていた。その間、東京学士会院会員のほか、文科大学長、哲学会会長、文部省中等教育修身科検定委員、教科書調査委員などを歴任、また哲学館・学習院などでも哲学・修身を講じた。東大退職後大東文化学院総長、貴族院議員（『近現代』）。

大浦兼武【卌二年頃県外礼状】嘉永三年（一八五〇）―大正七年（一九一八）鹿児島県。戊辰戦争、台湾出兵、西南戦争に参加、大阪府警部長、富山県書記官、大阪府書記官を歴任、明治二六年（一八九三）三月島根県知事。明治二八年（一八九五）三月山口県知事、明治二九年（一八九六）一二月熊本県知事、ついで宮城県知事に任じられるが即日辞職（明治三一年〈一八九八〉七月）、警視総監（明治三三年〈一九〇〇〉一一月）・貴族院議員（明治三三年〈一九〇〇〉三月）。逓信大臣、農商務大臣・内務大臣を歴任、大正四年（一九一五）七月引退。（『伊藤島根』、『平』、『島根歴史』）

三村友藝【卌二年頃県外礼状】

浅井郁太郎【卌二年頃県外礼状】慶応二年（一八六六）―？　石川県。明治二三年（一八九〇）東京帝国大学理科地質学科卒、さらに大学院に学ぶ。島根県尋常中学校長（明治二五年〈一八九二〉五月～明治二九年〈一八九六〉七月）、明治二九年（一八九六）北海道札幌尋常中学校、明治三〇年（一八九七）～明治三三年（一九〇〇）岐阜県岐阜尋常中学校（岐阜中学校）各学校長を歴任、明治三三年（一九〇〇）足尾銅山技師、のち文部省図書審査官視学官、大正二年（一九一三）辞職。理学士。鉱物学会の権威。学士会員。（『大正人名辞典Ⅱ』日本図書センター、一九八九年〈底本：猪野三郎編『大衆人事録　昭和三年版』帝国秘密探偵社、一九二七年〉、『北高』『職乙』『職甲』「官報」）

柳多元【卌二年頃県外礼状】柳多元治郎か。旧姓甲田。元治元年（一八六四）―昭和八年（一九三三）宮城県。明治一四年（一八八一）上京、竹内寿貞の同舟社などで学ぶ一方、四ツ谷仲町の山岡鉄太郎（鉄舟）の春風館に入館、無刀流剣術を学ぶ。鉄舟の高弟籠手田安貞が島根県に赴任後、明治二二年（一八八九）四月興雲館道場に助教として甲田を招く。松江藩士族で家老の家柄であった柳多滋美の娘律子と結婚、柳多家を継ぐ。明治二五年（一八九二）一一月から尋常中学校舎監、明治二六年（一八九三）六月から助教諭試補。課外で有志生徒に剣道を教授、松江中学の剣道の伝統を生むことになった。明治三〇年（一八九七）八月岐阜中学、大正三年（一九一四）東北帝国大学、宮城中学。明治四四年（一九一一）の著書「剣道教範」は同年文

部省が剣道を学校正課に定めると、これが学校剣道指導の教本となった。（『北高』、『職乙』）

和田豊【卅二年頃県外礼状】千葉県士族。明治一八年（一八八五）三月東京師範学校卒。明治一九年（一八八六）一二月段階で福島県尋常中学校教諭兼校長心得、明治二〇年（一八八七）一二月段階～明治二五年（一八九二）八月福島県尋常中学校長兼教諭、明治二五年（一八九二）八月～明治二九年（一八九六）六月青森県尋常師範学校長、明治二九年（一八九六）六月～明治三一年（一八九八）四月島根県（尋常）師範学校長、明治三一年（一八九八）四月～明治三七年（一九〇四）一月新潟県師範学校長、明治三七年（一九〇四）一月～大正一〇年（一九二一）三月兵庫県御影師範学校長、大正一〇年（一九二一）四月～昭和一〇年（一九三五）一二月財団法人親和高等女学校長。（東京高等師範学校『東京高等師範学校一覧』一八九八年、『福島県職員録』、『福島県管内職員録』『職乙』、『職員録』、「官報」、中等教科書協会編『中等教育諸学校職員録』一九二一年～一九三六年、兵庫県御影師範学校同窓義会編纂発行『兵庫県御影師範学校創立六十周年記念誌』一九三六年、綿谷禮利編纂兼発行『校祖友國先生』親和高等女学校汲温会、一九三七年。いずれも国立国会図書館デジタルコレクション）

関根汀二、松岡成高【卅二年頃県外礼状】

狭間重亜【卅二年頃県外礼状】生没年不詳。大分県士族。東京師範学校卒。明治八年（一八七五）三月島根県教員伝習校教員に任命。明治九年（一八七六）三月教員伝習校内に変則中学科（松江中学）開校、渡部寛一郎とともに教師。しかし、同年六月二一日付で辞職、上京。県より伝習校開校以来の功労についてとくに慰労金を贈られる。この後の経歴は不明であるが（以上『北高』）、明治一二年（一八七九）～明治二三年（一八九〇）ごろ「北海部郡役所書記」として名前が登場し（大分県編・刊『大分県職員録』明治一二年一〇月三日改・同一七年一〇月三一日改正・同一九年一月一日改正・同二〇年七月一日調・同二一年六月三〇日改正・同二三年一月一日改）、『職乙』『大分県各郡郡史』（日豊時報社編・刊、一九二六年）等には、明治二七年（一八九四）～明治二八年（一八九五）大分県内務部小学校教員銓衡委員、明治二九年（一八九六）～明治三二年（一八九九）大分県南海部郡役所郡長、明治三三年（一九〇〇）～明治三七年（一九〇四）大分県大分郡役所郡長として名前が見え、同一人物と思われる。（大分県の経歴については、大分県立図書館郷土情報担当にご教授いただいた。）

中本章三【卅二年頃県外礼状】長崎市十人町一八、**竹田廣助**【明治卅二年四月調】大坂西区江戸堀上通一丁め一一八（尼ヶ崎橋西詰西入南側）

内田文太郎【明治卅二年四月調】大坂市東区南本町四丁め四八〇。明治二五年（一八九二）七月松江中学卒業生か。（『北高』）

本荘太一郎【明治卅二年四月調】文久三年（一八六三）―昭和二年（一九二七）松江市。明治一五年（一八八二）教員伝習校卒。卒業後、松江中学校授業補助、島根県第二中学校（浜田中学）教諭試補、明治一八年（一八八五）七月辞職して上京、文部省検定に合格、明治一九年（一八八六）東京府尋常師範学校教諭、明治二六年（一八九三）京都府尋常中学校長（この時期、全国中学校長会の指導者のひとり）、明治三五年（一九〇二）ごろ東京高等師範学校教授と教育界で活躍を続ける。明治四一年（一九〇八）台北中学校長兼台湾国語学校長、大正二年（一九一三）長野県立松本中学校長をつとめ、大正七年

（一九一八）から大正一四年（一九二五）までは神戸市教育局長。教育学に関する著書多数。（『島根歴史』『北高』）

沢野氏【明治卅二年四月調】（京都市）下切通新烏丸東入四二。沢野真造か。明治三〇年日記（「翻刻　渡部寛一郎日記1」『山陰研究10』）と同住所。

桑原羊次郎【明治卅二年四月調】（東京）麻布区桜田町七二。明治元年（一八六八）―昭和三一年（一九五六）　松江市。明治一八年（一八八五）七月島根一中卒、英吉利法律学校（中央大の前身）を経て米ミシガン大卒。明治二七年（一八九四）から明治三三年（一九〇〇）までは郷里松江にあって松江電灯会社社長、松江銀行取締役などを務める。明治三四年（一九〇一）鴻池銀行神戸支店長。大正九年（一九二〇）衆議院議員当選。私立松江図書館創設（のち県立）にも尽くす。美術品の鑑定と浮世絵の収集は世界的で、明治四四年（一九一一）のローマ万博では日本美術館主任として活躍した。蔵書の一部は島根大学に寄贈され、桑原文庫として付属図書館にある。（『島根歴史』『北高』）

石井信敬【明治卅二年四月調】浅草老松町三番地。栃木県出身。『明治一六年一一月改　島根県職員録』に名前が見え、明治一七年（一八八四）八月段階で学務課長兼衛生課長、明治一九年（一八八六）段階で島根県第二部、尋常師範学校長補、兼学務課長、明治二一年（一八八八）段階で島根県第一部庶務課長官報々告主任（『島根県職員録』、『職乙』）。明治一七年（一八八四）九月、学務課長石井信敬、師範学校長兼中学校長田所貢が中心となり、教育会設立の呼びかけが行われ、一〇月一六日島根県私立教育会発足。会長石井、副会長田所、幹事渡部寛一郎ら。（『北高』）。

付記

本稿は、
島根大学法文学部山陰研究センター山陰共同研究プロジェクト
近代山陰の政治と文化―「渡部寛一郎関係文書」・「若槻礼次郎関係文書」に見る漢詩と政党政治の関係分析を通して―（課題番号一六一一　期間二〇一六～二〇一八年度　代表　要木純一）
及び、
科研費基盤研究（C）
近代山陰地域の漢詩と官僚出身政治家の文化教養環境―中国文学と日本史学の学際的研究（研究課題／領域番号16K02366　期間二〇一六～二〇一八年度　研究代表者　要木純一）
による成果の一部である。

Anotation on Diary of Watanabe Kanichirou:1898

Oguni Yumiko
(Research Project on Works of Watanabe Kanichirou)

〔Abstract〕

Watanabe Kanichirou (1854－1938) was an influential educator in Shimane prefecture and the head of the society in support of Wakatsuki Reijirou (Kokudoukai). Here I made notes on his diary written on 1898. Through this Anotation we can perceive Wtanabe's relationship with important persons of educational society and statesmen and beaurocrats. Also we can understand the situation of the central politics and the local politics in those days. Most of the notes are based on rare historical mateareals which are not easy to search now.

Keywords：Watanabe Kanichirou, education, Meiji era